

『学会開催報告』

第45回日本婦人科腫瘍学会学術集会

金沢大学医薬保健研究域医学系 産科婦人科学

学会長 井上正樹

第45回日本婦人科腫瘍学会が平成20年11月22日23日の2日間、石川県立音楽堂で開催されました。本学会は全国の産婦人科領域の腫瘍、特に癌を専門とする医師、産婦人科医のみならず病理医、放射線治療医、腫瘍内科医などを含む約1,600人の会員数からなる極めて専門性の高い学術団体です。専門医教育や専門医試験を早くから実施し、日本の専門医の先鞭的集団です。金沢の学術集会には約800人の参加がありました。

秋の学会は治療を中心テーマとした教育プログラムを重視した企画であります。本学術集会のテーマは「新しい分子標的治療を求めて」です。

今回の学術集会の中心的企画は難治性癌への未来医療と難治性癌の化学療法の有効性と手術療法の検証です。

未来医療ワークショップでは「難治性癌への新しい取組みで」を中心テーマに金沢大学で先鋭的に研究を進めておられる先生方が以下のテーマで講演をされた。

- 1) 抗がん薬のファーマコジェネティクス：金沢大学・薬学系・薬物代謝学・中島美紀 先生。
- 2) カフェインによる薬剤感受性増強：金沢大学・医学系・機能再建学・土屋弘行 先生。
- 3) 抗サイトカイン療法の可能性：金沢大学がん研究所・分子生体応答研究分野・向田直史 先生。
- 4) WT1ワクチンの臨床試験：金沢大学・医学系・補完代替医療学・大野智先生。
- 5) テロメアバイオロジーを用いた癌治療：金沢大学・医学系・産婦人科学・高倉正博 先生。
- 6) 卵巣癌に対する分子標的治療：新潟大学・医歯総合研究科・生殖器官制御学・八幡哲郎 先生

各先生方の講演内容は大変素晴らしく、多くの先生方から絶賛頂いた。特に、我々の教室からの世界に発信している京講師、高倉助教を中心とした研究グループのテロメアバイオロジー研究は驚嘆の域であったと絶賛された。

教育講演では、1) 金沢大学がん研究所・遺伝子染色体構築研究分野・平尾教 先生から「正常及び腫瘍組織における幹細胞制御システム」について、2) 金沢大学がん研究所・細胞機能制御研究分野・佐藤博 先生から「がんの浸潤・転移に絡む分子標的治療の開発」について、3) 千葉大学生殖機能病態学・生水真紀夫 先生から「ホルモン感受性癌の治療戦略」について講演を賜った。三人の演者ともそれぞれの分野で日本を代表する

研究者です。平尾教授は癌幹細胞研究に新しい知見を集積し時代の寵児となっています。佐藤教授は癌の膜型の酵素、MT-MMPの発見者であり、癌細胞の浸潤・転移の概念に新規軸を打ち立てた研究者です。生水教授はアロマトラーゼ欠損症を世界に先駆け発表し、アロマトラーゼの転写制御では世界をリードしてきた研究者です。3年前、私ども金沢大学産婦人科助教授から千葉大学教授産婦人科教授に転出され、現在アロマトラーゼ阻害剤を用いた癌治療を展開されている臨床医です。

教育講演では臨床医にもわかりやすく生命科学の妙を解説され、多くの会員から「時間を忘れるほどに深い感銘を得た」と報告を受け、同時に金沢大学医学系研究者達の層の深さに驚かれた様子であった。

ランチョン・セミナーは費用もかさむことから海外からの講演を依頼した。特に話題性の高いHPV関連の臨床的研究者2名(Columbia U, Prof. Wright TC.) (GSK, Chief Invest. Prof. Noro N) はHPVの発癌機構の解説とワクチンについて、HPVのがん検診への導入について講演頂いた。難治性である卵巣癌の分子標的治療を含めた新しい治療戦略について2名の臨床研究者(Fox Chase Cancer Center, Prof. Schilder RJ) (California U. Irvine Medical Center, Prof. Monk BJ) が将来の癌治療のパイロットとなる講演を行った。

モーニング・セミナーは癌に苦しむ人達への救いの道は無いのかをテーマに従来の癌治療を補完する「がんの補完代替医療」について、金沢大学薬学系研究科・太田富久先生と金沢大学補完代替医療学・鈴木信孝先生が講演した。補完代替医療学講座は7年前に金沢大学産婦人科から独立して設立された寄付講座である。病院では産婦人科外来に相談窓口を設け、抗癌剤無効の患者相談に乗っている。また、厚労省後援での補完代替医療のガイドラインを作製し、医療の安全性・有効性について検証を進めているとの内容であった。

教育セミナーは婦人科腫瘍専門医の必須のセミナーである。医療者は何を目的として誰のために医療行為を行うのか。癌医療の本質を考えさせる内容であった。1) 金沢大学附属病院臨床試験管理センター 古川裕之 先生は「臨床試験の進め方」、2) 金沢大学・内分泌・総合外科、大村健二 先生は「癌患者の栄養療法」、3) 新聞紙上で医療問題に患者の立場から精力的に発言されている 読売新聞記者 本田麻由美 様は「がん難民を作らないために」と題して講演された。重い内容を明るく且つ教育的解説をしていただき最高のセミナーと担当理事の先生から評価を受けた。

クリニカル・ワークショップはコンセンサスの得られていない臨床的な問題を2つ取り上げ、実地臨床の現場から6名の先生方に自己の臨床データを提示し、座長の下で素晴らしいディベート形式の討論が行われた。

ワークショップIは、卵巣癌の2nd/3rd line化学療法は？－私はこうしている－

ワークショップIIは、子宮体癌手術に傍大動脈リンパ節郭清は必要か？－私はこうしている－

手術療法にエビデンスを見つけるのは難しいが、京講師(金沢大学産婦人科)の提示は白眉であり合理的な議論をリードして注目された。

会長講演は「子宮内膜の再生と癌化」と題して、内膜の再生がOne gland One stem cellで行われ、内膜癌にもCancer stem cellが存在することや発癌における遺伝子変化を包括的に捉えるためにEIN(Endometrial Intraepithelial Neoplasia)の概念を提案した。

後日、多くの参加者から「金沢大学には優れた研究者の層の厚さにびっくりしました。」「平成のルネサンスの如く感じられました。」などの意見が寄せられています。七尾出身の長谷川等伯作「月を掬う猿」の思いを充分生かさせた学会を開催することが出来大変光栄に感じています。皆様へ感謝いたします。



月を掬う猿 長谷川等伯